

地域と協同の研究センターNEWS

2024年10月25日発行

242号

研究センター創立30周年記念特集 ③

次期中期計画づくりに向けて

駒井 義明（地域と協同の研究センター 専務理事）

地域と協同の研究センターは今年度設立30周年を迎えます！

次期中期計画（2025年度～2028年度）づくりの始まりの場として、9月21日（土）理事懇談会を開催しました。午前中は、東海交流フォーラムの実行委員会を開催し、その参加者を含めて拡大での理事懇談会です。

2025年は、地域と協同の研究センターは設立30周年、戦後80年、そして、国際協同組合年に選ばれた節目の年となります。設立の趣旨、原点、これまでの活動を振り返りながら、これからの時代に求められていること、そして、私、私たちがしたいと思う活動について、議論する始まりの場となりました。常任理事会で議論している重点にしたいことなど、私が着目、参加した活動にポイントを置いて以下の提案をいたしました。

まず、現行の中計、方針に掲げている4つの柱、特別課題についてです。「食と農フォーラム」で見学したオアシス21でのオーガニックファーマーズの取り組みでは、食料の確保がますます厳しくなる中で、出来上がったものを食すことや、このような活動を学びなおすことの大切さを学びました。デイリーファームでの「放牧たまご」の取り組みでは、小学校から鳥小屋もなくなり、子どもたちが卵がどうしてできるかもわからなくなる中で、挑戦するお話を取り上げました。新城で開催された「平和学習会」では、若い先生方が自分たちの生徒に、戦争被害にあい、難民として苦難にあっている人がいるかもしれないという実感、コープみえ「みやがわ店」では、広くはない敷地でも地域の拠点として組合員の集う場を作ろうとしてオープンされたこと、などなど動画も交えて報告しました。

会員が主体者であり、私、私たちが次の中計を考えていきましょう！

2025年度からの中計の重点では、日本生協連からの、全国の生協が担い手不足で苦しむ中、組合員がつくる生協という組織のこれからのあり方、居場所やコミュニティづくりに生協が関与すべきなどの提起を受けて、東海の3生協がともに研究し、これからのあり方をまとめていきたいと思います。

また、研究センターでは、多文化や難民支援、子ども食堂など研究や実践交流の場を広げてきました。一方で、SDGsのスローガンにあるように、「誰一人取り残さない」という視点で見直し、協同の輪につながるができるのか、できていないのかなど課題整理を始めたいと考えます。

研究センターが東海の3生協と一緒に主体的に取り組んでいる重点に「3つの学びの場（生協職員マイスターコース・協同の未来塾・組合員理事ゼミナール）」があります。国際協同組合年を迎えるにあたって、協同組合で働くこと、生協で働くことを見つめなおす「生協学校（仮称）」として内容をさらに充実、高めていきます。あわせて、戦後80年の節目であり、平和をテーマにした学習（たとえば、沖縄研修）に取り組むたいと考えています。

理事懇談会では、初代研究センター長の野原敏雄先生、田辺準也さん、小木曾洋司先生にお話しいただきました。次ページからの報告を参照ください。

会員のみなさんのご意見もお寄せいただきたいと思います。よろしくお願いします。

【2ページにつづく】

地域と協同の研究センター 10月の活動

1日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」③	19日（土）第4回生協職員マイスターコース
2日（水）あいち在宅懇話会	20日（日）多文化社会と協同組合懇談会
4日（金）第5回常任理事会	22日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑥、研究フォーラム地域福祉を支える市民協同
5日（土）アジアボランティアネットワーク東海世話会	25日（金）日本協同組合学会第44回大会特別シンポジウム「協同組教育について」、第6回常任理事会
7日（月）協同組合等研究組織交流会	26日（土）～27日（日）日本協同組合学会第44回大会
8日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」④	28日（月）ウクライナ避難者支援ネットワーク「情報共有会議」、三河地域懇談会
9日（水）「協同の縁交流会in 飛騨・高山」	29日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑦、尾張地域懇談会、研究奨励助成・成果報告会
11日（金）第4回協同の未来塾	31日（木）第2回組合員理事ゼミナール
12日（土）難民食料支援学び語り合う会、 「若い力、大集合！クロストークミーティング」	
15日（火）名城大学人間学部「ボランティア入門」⑤	
19日（土）岐阜地域懇談会プチフォーラム、アジアボランティア学習会、	

目次	次期中期計画づくりに向けて	1 情報クリップ	6
	講演会「ウクライナ避難民の支援と生活」に参加して	5 書籍紹介「詩集—いのちの芽」	8

【1ページからつづく】

野原敏雄さん（初代研究センター長）のお話**研究センターという名前にこめた思い**

私は1930年、8月生まれで、94歳になったところです。研究センターが発足して30年。感慨もひとしおです。私の専門は史学、地理学で協同組合の研究家でもなんでもないのですが、田辺準也さんに「京都には研究所がある。神戸では組合員の勉強を広げていくような研究機関がある。東海にもそういう研究所をつくりたい、協力いただけないか」と依頼をいただきました。その時二つ注文をつけました。一つは、研究所ではなく、名前を「研究センター」にしてほしいということです。協同組合は組合員や職員が集まって、お互いに協力して運営する、そういう場であるべきだと考えたからです。みんなが集まるセンターで、その一員として学ぶことが重要です。もう一つは、協同組合原則に出てくるように協同組合間協同の重視です。さまざまな協同組合がありますが、互いに交流しあい、たすけあいながら仕事を高めていく、そういう協同組合連携を尊重する場であってほしいと。この2つの注文を受け入れていただき、地域と協同の研究センターが発足しました。

**東海交流フォーラムを広げ強めること、鶏頭という名前のこと**

お話ししたいことの一つは、毎年開催されている東海交流フォーラムについて。東海交流フォーラムは定着するのに数年かかりました。はじめはお仕着せの感じが強かったのですが、次第に各地の組合員の経験、問題を持ち寄ろうという機運が強まりました。それが定着していると思います。ニュースや報告などで勉強させてもらおうと、みなさんがたの熱意が伝わるような中身が、フォーラムで共有されています。それが生協を強めていると確信できるのです。この方向を深める、広げる、強める必要があると思っています。

もう一つのお話ししたいことは、なかなか会場に参加して考える、議論することが大変なことです。それができない人はいっぱいいる、そのために報告書があり、さまざまな資料も整えられるわけですが、その資料をきちんとまとめた研究誌をつくったらいいと考え、その研究誌の名前を「鶏頭」と名付けさせていただきました。詳しくは第1号に掲載されていますが、私は1930年生まれで、中学校までは学徒動員などで勉強できませんでした。やっと勉強できるようになったのは、旧制中学4年生になってからで、深く印象に残った授業がありました。その一つは漢文で「鶏口となるも牛後となるなかれ」という中国の言葉があります。鶏頭が秋に咲いている風景を見て、その後、国語の時間に「鶏頭の十四五本もありぬべし」という正岡子規の俳句に出会いました。鶏口牛後と子規のありようを考えながら、研究誌の名前には「鶏頭」がいいと思い、それは私自身の励ましにもなりました。研究誌の題字は、大学時代の友人で有名な書家、樽本樹郎（たるもとじゅそん）さんに揮毫をお願いしました。気品と重厚さで知られる篆書体です。研究誌は、今まで5号出版されていて、フォーラムなどのいろいろな思いがうまく載せられていて、いい仕事をしたと自慢したいと思っています。特に女性の活動が目立つことを実感しています。英語に堪能な人もいらっしゃるので、サブスクリプトをつけたら国際的にも宝物になると思います。何十号と続くようであってほしいと思います。

協同組合に集まる人に望むこと

今、協同組合の研究に集まる人たちは何を指すのでしょうか。SDGsです。17項目を実現するというのが大切です、特に核兵器禁止条約が十分に機能するような国連機関がつけられること、そのためにICAがもっと大きな力を持ち活動することが望まれます。日本は力をつけて、その活動することが大切です。もう一つは地球環境です。災害多発は、あきらかに地球が壊れていることを示しています。食料問題も困難な時代になっています。協同組合は、地球環境の保持に大きな力を発揮すべきです。そういう論文が数多く鶏頭にのり、全世界に訴えていくことを心から願っています。期待を込めてお話を終えたいと思います。

田辺準也さん（初代表理事・現理事）のお話**素人集団の消費者と専門家が力をあわせて何かを実現しようとしてきたのが研究センター**

みなさんの力で、研究センターは実績を残すことができたと思います。研究センターが発足して30年、当初思っていた以上に大きな役割を果たしてきた。これは私自身のことではなくて、野原先生をはじめとした研究者のみなさん、何よりも生協の組合員のみなさん、地域の方のみなさんの力で研究センターをここまで育てていただいた、実績を残してこれたと思っています。想定以上に役割を果たしているので、この成果をできるだけ大勢の方に知ってもらい、理解してもらいたい。いかに大きな課題だと思っています。

研究センター出発のときの中心的組織であった生協の活動経験に照らして、お話をさせていただきます。私は生協がこの名古屋の地域で発足するときから関わったので、当初、生協がここまで発展することは希望としてあったが、実感としてはありませんでした。ここまで発展したのはなぜだろうかというのは常に私の思いです。一言では申し上げられませんが、要にあったのが、メンバーのみなさんの



学習、物事を知る、理解するという力が大きいと思います。勉強といっても学校で勉強するというのとは違います。初期、生協をつくることをがんばった消費者のみなさんは、文字通り井戸端会議というかたちで経験を交流し合い、話し合っているいろいろなことを決めていく行為があり、結果としてみなさんの消費者の問題のいろいろ理解がすすみ、まとまれば安くなる、いろんな商品が手に入る、それを実践しようとしたのが生協活動だと思います。消費者が買い物をするを通じて、力を合わせる活動として生協を設立したと思っています。その際に、お互い理解し合って、語り合って深める行為こそが力になりました。消費者ですから数の力が大きな役割を持ちますが、数を集めるために、理解の問題が大きかったと思っています。そういう活動の経験の延長線で研究センターの活動は発展しました。その際大きな役割を果たしていただいたのが専門家、研究者のみなさんです。消費者、広範な素人の集団と専門家が力をあわせて何か実現しようとした、それを研究センターは一貫して今日まで追求し続けました。その成果があり、消費者の理解もすすみ、生協という組織も大きく成長してきました。大きな流れの中で、さらにその流れを促進するために、研究センターはいかに役割を果たすのか今問われていると思います。消費者は理解促進のために学習します。井戸端会議で、隣近所で話し合う、情報交流する、それが持つ学習効果は大きなもので、そこから協同の行動が力強く発揮されてきたと思います。

組合員が遠い組織とならないよう

個人的な実感ですが、生協活動を始めたころ、世の中の状況で、食品添加物問題、添加物の危険性の問題が起こりつつありました。その問題を、最初から粘り強く研究されていたのは、名古屋大学の若手の研究者（助手とか大学院生）のみなさんでした。系統的に研究会をもたれて、そこに参加させてもらい、食品添加物の本質などを勉強させてもらいました。参加されているみなさんに講師になってもらい学習もしました。その後、生協の無添加食品、無農薬食品に発展します。当時洗剤の問題もあり、三重大の先生にもお世話になりました。そういう形で、専門家の方の知恵を受け止めることができたことが、消費者の意欲を喚起し、力になったと思います。消費者は徹底的に素人集団ですが、専門家の力も借り、自ら努力し学習し、その中で生協の役割も理解し、運動を発展させてきました。

当たり前のことですが、世の中は競争社会で、日進月歩に問題が発生します。かなり努力しなければ学習は難しい側面がありますし、組織が組織として動き出す側面があって、生協も組合員の組織と言いつつ、組合員と離れた動きをすることが起きます。情報が伝わらないことが起きます。そこをどうするかが課題です。課題を解決するのは、生協そのものですが、生協の理事会などがどう努力するかが課題になります。生協活動の実際には、そこに力を注ぎきれない、取り残されていく傾向がどうしてもあります。それは生協だけでなくあらゆる組織であります。組織が独り立ちすると、一人歩きすることがあります。どう克服するかということで、研究センターがつくられた経緯もあります。その際、生協は地域で活動してきたので、いくつかの組織、具体的には今も一緒に活動しているゆたか福祉会や南医療生協のみなさんが同じような課題をもっています。だったら一緒にそういうテーマを検討しようということで研究センターをつくりました。多くの組織と一緒に同じ課題に取り組んだことが、大きな力になったと思います。問題は、そうなればなるほど、生協の一組合員からは遠いものになったことです。研究センターに望むことは、発展させればさせるほど乖離が生まれてしまうことをどう克服するか、どう解決するかということです。

私も年をとって、独り立ちできるか切実な問題ですが…自立と協同はセットです。「自立と協同」は社会全体の大きなテーマです。あらためてこのテーマをしっかりと位置付けていき、多くのみなさんに成果を伝えることが望まれます。ICA大会との関係もあり、このテーマを深める努力をしています。成果を生かしてみんなのものにすることを、私のこれからの研究センターへの期待とさせていただきます。

小木曾洋司先生（中京大学教授・現常任理事）のお話 社会的な富という認識とそれをどう社会的に生かすのか

「人口ピラミッドの変遷」を見てすぐわかるのは、1950年生まれた子どもの数240万人、2000年に半分。さらに推計ではまた半分に。人口減少という大きな変化があります。少子高齢化の図です。もう一つははっきりさせておきたいのは、2050年、人口の3分の1以上が65歳以上に。1950年には高齢者はマイノリティですが、今はマジョリティ、このことが大きな社会の在り方を規定していきます。高齢者がこれからどう生きていくかが問題です。大正9年、昭和36年、平成21年のライフサイクル図があります。大正9年は、国勢調査最初の年です。子どもを5人くらいつって、夫は61歳で亡くなっています。産み育てる人生です。ところが、戦後の高度成長期になると、学歴が高くなり、夫引退以後が長くなります。1960年だと「余生」と言われていました。1980年代になると、これが「第二の人生」と言われるようになり、「濡れ落ち葉」「恐怖のわし



[illegible]

余生が人生の3分の1くらいになるのは、たいへんなことです。財産は個人に属していますが、「**社会的な富**」だと言っていると思います。マイノリティの数と、一人の人間が持つ退職後の人生の時間数をかけたら社会的な富が出てくるわけです。これをどう使うかという問題で、生協がどう関わるかという問題だと思います。

こういう状況の中で大切なのは、家族単位で生活を維持するのが難しくなることです。どう社会化するか。その一番の走りが介護保険。もう一つうまくいかないことがあって、社会的に孤立するリスクというテーマですが、**2017年「生活ささえあいに関する調査」**があって、この中の孤立状況という問題で、「会話頻度と頼れる人の有無」を調べています。高齢単身男性の**15%**が**2週間**に**1度**しか会話をしていないという状況が出ています。非高齢の単身男性でも**8.4%**。単身世帯だととにかく喋れない、自己防衛で喋らないということがあるのではないかと思います。頼れる人の有無を見ると、子ども以外の介護や看護については、高齢の男性の**4割以上**が「いない」です。日常生活の手助けは、高齢の単身男性の**3割**がいないそうです。それを社会化しないといけない、地域での関係性を作らないといけません。高齢者の数、社会的富をどう使うか。一つは自分の家族のケアですが、もう一つは社会的再配分の行為として、地域の活動（子ども食堂やサロン活動）があります。ガーデン大山田、やなマルシェもそうですが、びっくりするのが、ほとんど中心が女性です。高齢者も多くいます。活動の主体としての女性たちを、きちんと位置付けることが重要です。高齢者は老人とは違います。高齢者は、現役を**15歳～64歳**と設定したから出る概念で、高齢者は無理やり職場から排除されています。これを大きな課題にしていきたいと思います。シルバーカレッジの講師をしています、みんな自分探しをしていることがわかります。どういう活動したらいいか悩んでいます。フレイル予防の協同組合ができていいと思います。

若い人たちは、今を大事にする、今を楽しむようになりました。いいことなのか悪いことなのかを議論するつもりはなく、若い人の意識をくみとることが大切かと思います。もう一つ、若い人が望んでいるのは、社会的承認です。認めてほしいという思いをどこかで受け止めないといけないですね。

もう一つやっておかないといけないのは、ジェンダー問題です。子どもが男か女かで親の対応が違ったかと学生に聞くと、「ありません」と言います。しかし、日本のジェンダー指数はとても低い。日常生活の中で気づいていないということです。それをどう決り出すかです。子どもを産まない理由、少子化の理由がそれです。この社会が女性の生き方を抑制しています。それを解決しないと、少子化は解決しません。

• ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ • ■ •

④



講演会「ウクライナ避難民の支援と生活」に参加して

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

梅雨の季節に中京大学社会研究所から講演依頼の連絡をいただきました。その内容は「ウクライナ紛争が始まって2年以上経つが、まだに終わりが見えず、日本にきた避難民の方達の生活が長期化しようとしている。その一方でメディアによるウクライナに関する報道は減りつつあり、避難民の方達の実情もほとんど知られていない」ことについて言及され、「ウクライナ避難民の概要、避難民への支援（言語、就労、住居など：行政、民間別に）、生活実態、難民との違いについて話をしてください」ということでした。そこで行政職員や難民支援の専門団体、ウクライナ避難民の方と一緒にお話をさせていただくことを提案させていただいたところ、ご快諾くださり、2024 年度中京大学社会科学研究所 学術講演会「ウクライナ避難民の支援と生活」へウクライナ避難民の方、小牧市役所多文化共生推進室、名古屋難民支援室の皆さんと一緒に参加することになりました。講演会は 10 月 11 日の夕方 17 時から中京大学名古屋キャンパスとオンラインの併用で行われました。公開の講演会でしたが、避難民の方への支援を一緒にしてきた方達、中京大学の学生の皆さんも参加してくださっていました。

ウクライナ避難民の方からは、戦争が始まってから日本に避難するまでの経緯、避難してからの日本での生活、受けている支援と感謝の言葉が述べられました。そして、今後について、「どのように生活や仕事を考えていくことができることがわからないため、今後どのようにしたいかを示すサポートがあると助かります」と提案してくださいました。

名古屋難民支援室の羽田野真帆さんからは、難民条約が定義する「難民」、日本の難民受け入れの経緯についての説明、地域と協同の研究センターが名古屋難民支援室、アジアボランティアネットワーク東海と一緒にやってきた難民食料支援があったことで、ウクライナ避難者支援体制づくりが迅速に行えたこと、ウクライナ避難民の受け入れがきっかけで難民の公的支援（保護費）に変化がもたらされたことが紹介されました。

小牧市役所多文化共生推進室の堀田室長からは、小牧市がウクライナ避難民を受け入れた経験を担当職員としてお話いただきました。避難民の方が到着される前に社会福祉協議会から日用品を支給いただいたこと、セントレアまで職員が出迎えに行った際のこと、翌日から行った支援：銀行口座の開設、携帯電話の契約支援、公営住宅の提供、家具、電化製品、日用雑貨等の物品支援（市職員から寄付を募集）、電気、ガスの契約支援、公営住宅の自治会役員との顔合わせ、生活支援金の支給、就労支援（ハローワークへの同行、履歴書作成のサポート）、日本語教室の案内、近所のスーパーの案内、電車の乗り方の確認等多くのサポートについて具体的に紹介いただき、その際の課題も教えていただきました。そして、就労支援や精神的なサポートが大変であったこと、帰国を選択された避難民の方の帰国される際の支援についても様々な課題があったことをお話しされました。途中、涙ぐまれる場面もあり、大変な状況の中で、避難民の方に寄り添い必要とされるサポートを懸命にされてきたことが伝わってきました。

私からは、講演日時点でのウクライナ避難民の数と年齢別の特徴とその背景、緊急支援が必要だった時期に、受け入れ自治体がそれぞれどのように受け入れたか、13 の自治体を訪問して担当職員がそれぞれどのようにウクライナ避難民の受け入れ体制を作り、それが叶わない自治体職員がどのように既存の制度を活用して工夫をされてきたかについて紹介しました。また、私が直接訪問するなどして関わらせていただいた避難民の方達が共通して向き合ってきた困難や課題、それらを少しでも和らげるために企画した大学キャンパスでの学生との交流や、畑での芋掘り交流、バザーを通じた支援や、個々人の方達からいただいた寄付を通じて自転車やエアコン、帰国費用のサポートなどの事例をお話しさせていただきました。

避難から数年が経過し、定住支援が必要とされている中で、雇用支援や生活支援、言語習得や社会参加の機会などが不足していることが課題となっています。これらの課題は、国の移民受入政策の不足に多くが起因しており、これまで日本に暮らす海外出身の人たちが置かれている現状と重なります。ウクライナ避難民の受け入れにより、難民の受け入れに関する制度や、市民社会の意識が少しずつ変化してきています。ウクライナ避難民支援をきっかけに、これまで何十年にも渡って保留とされてきている移民難民の方達が置かれている状況に、変化をもたらすように社会全体の意識が向くことを希望します。

（かんだ すみれ）

情報クリップ

co-opnavi

2024. 10 No. 869

特集 能登半島地震発災後、生協はどう対応したのか

日本生活協同組合連合会 2024 年 10 月 A4 判 32 頁 363 円（消費税込）

<私たちの「この一枚」> コープぐんま

地域の方々と手を取り合い助け合う

「くらしのたすけあいの会」 総合企画室 新井尚美

特集

能登半島地震発災後、生協はどう対応したのか

<今日も笑顔のコープさん>

コープみえ

<想いをかたちに コープ商品>

コープヌードル 柚子しお

<生協大好きママコプ山さんの 教えて! CO・OP 商品>

CO・OP ファミリーチョコレート

<CO・OP の役立ち♪家庭用品>

CO・OP セフターE/セフター漂白剤入り

<組合員に支持される店づくり・売場づくり>

ユーコープ

<松丸 奨先生の食育エッセイ>

進め栄養!

<生協の D&I 多様性のある職場をつくろう>

川崎医療生協

<この人に聴きたい>

サステナブル料理研究家、

(一社) DRYandPEACE 代表理事 サカイ優佳子さん

<ほっと navi>

おおさかパルココープ / おかやまコープ

生活協同組合研究 2024. 10 VOL. 585

特集 店舗を改めて考える

公益財団法人 生協総合研究所 2024 年 10 月 B5 判 72 頁 定価 550 円（消費税込）

巻頭言

「宅配/店舗」と「事業/運動」の

ふたつの位相から考える“つながりのイノベーション”

伊丹謙太郎

特集

店舗を改めて考える

スーパーマーケットと話題力

寺本 高

デジタル時代における食品スーパーの存在価値

ーアプリを主軸とした生協事業の有機的連携ー

高橋 広行

小さくても強いローカルSMに学ぶ

店舗事業活性化のヒント

森本 守人

日本におけるセルフサービスの歴史的展開 青木 均

消費者のくらしの変化と生協の「店」

ー生協「らしさ」から考える店舗事業の課題と展望

加賀美 太記

コープやまぐち ここといずみ店でのインタビュー

太田高志（聞き手：鈴木 岳）

■国際協同組合運動史（第31回）

1951 年第 18 回コペンハーゲン ICA 大会 鈴木 岳

■本誌特集を読んで（2024・8）

今野 聡

■研究所日誌

●アジア生協協力基金 2025 年度・

助成金一般公募のご案内

●11 月 30 日 第 33 回全国研究集会〈開催予告〉

「地域からつむぐ協同組合のアイデンティティと明日」

文化連情報 2024. 10 No. 559

今こそ健康づくりで食の安全を守る運動を

日本文化厚生農業協同組合連合会 2024 年 10 月 B5 判 64 頁 文化連情報編集部 03-3370-2529 *注

農協組合長インタビュー（100）ハリマ農協

持続可能な家族農業で山間地の環境を保全

柴原利春

今こそ健康づくりで食の安全を守る運動を

「紅麴」健康被害から考える機能性表示食品の課題

田中里奈

医薬品卸売業者に対する

共同購入参加厚生連の連名要請

院長インタビュー (352) 南島メディカルセンター
町立病院と連携し、漁村型地域包括ケアを担う医療

宮崎光一

日本文化厚生連「第 76 回会員厚生連常勤役員・参事会議
令和 6 年度第 1 回会員単協常勤役員・参事会議」講演要
旨

生命輝かそう JA・厚生連・文化連の仲間達

～コロナ禍を教訓に～

邊美公雄

本格化する「医療・介護連携」(3)

社会福祉法人 稲穂会への事業統合の経緯と展望

～JA 介護事業の事業継続と地域貢献～

林 佳史

協同精神のリレー (19)

賀川豊彦ーその協同思想

伊藤澄一

二木教授の医療時評 (224)

「こころの健康」を初めて論じた

「令和 6 年版厚生労働白書」第 1 部

二木 立

「医工連携」が拓く医療技術イノベーション (3)

どんな立ち上げ時期にも苦難はつきもの

梅津光生

野の風 霞ヶ浦編

農業者・生活者として語る (10)

一門さんに学ぶ 「引き際」

山口和弘

変わる日本のまちづくり (51)

財政再建団体となった過疎地夕張のまちづくり

一般社団法人らぶらすの実践 (2)

杉岡直人・畠山明子

多様な福祉レジームと海外人材 (76)

移住労働の女性化を考える：例外的な日本の実態

安里和晃

デンマーク & 世界の地域居住 (183)

「福祉でまちの困りごとを解決」する

「GOOOOOOOD STATION」(長崎県長与町)

松岡洋子

◆第 6 回地域共生フォーラム 開催のお知らせ

◆第 11 回厚生連放射線科医療機器

ライフサイクルコスト会議 開催のお知らせ

□書籍紹介 コロナ「留め置き死」

ー医療を受けられなかった人たち

□書籍紹介

チョコレートを食べたことがないカカオ農家の子ども

たちにきみはチョコレートをあげるか

大川総裁の福祉論！

ー知的障がい者と“食う寝るところ、住むところ”

▶線路は続く (189)

タイムカプセル 姫路モノレール

／ 西出健史

▶最近見た映画

ぼくのお日さま

／ 菅原育子

生協運営資料 2024.9 No. 338

CO・OP 共済 40 周年 ライフプランニング活動 30 周年を迎えて

日本生活協同組合連合会 2024 年 9 月 B5 判 70 頁 880 円 (送料別)

巻頭インタビュー

●私たちの生協のこれから

誰もがファンになってくれる生協へと

組合員、職員と共に変わってゆく

大阪よどがわ市民生協●理事長 藪内 剛氏

特集

CO・OP 共済 40 周年ライフプランニング活動 30 周年を迎えて

1 CO・OP 共済開始から 40 年

組合員の支持で大きく広がる

コープ共済連●代表理事理事長 和田寿昭氏

2 生協の理念をカタチにする CO・OP 共済の良さを

「平月推進」で伝える

生協ひろしま●専務理事 事業本部本部長 高浦美穂氏

3 活動開始から 30 年

組合員同士で育んできたライフプランニング活動

コープ共済連●常務執行役員

管理・総合マネジメント担当 兼 管理本部部長

前田かおり氏

4 多彩なセミナーを通じて組合員や地域に貢献する

ライフプランニング活動

こうち生協●運営企画グループ幹事会事務局

LPA の会事務局 中野 剛氏

●これからの店舗事業のあり方を考える

第 42 回「マルチ化」を進め、地元を意識した

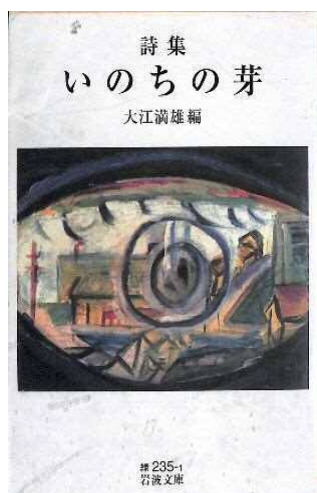
「オンリーワン店舗」の運営を継続

コープやまぐち●常務理事

店舗・生活事業・商品部管掌 太田高志氏

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介



熊崎 辰広 会員からの書籍紹介

「詩集—いのちの芽」 大江満雄編

出版社：岩波書店（岩波文庫） 発売日：2024年8月 価格：1,364円（税込）

熊崎 辰広 会員からのご紹介

今年7月、岡山県の国立療養所長島愛生園を見学する機会がありました。長島という小島に愛生園の敷地が広がっています。

実際にはハンセン病は感染力が弱いにも関わらず、国策によって隔離され、人権無視の断種手術が行われてきた特異な空間のなかで、一生をそこで過ごし、死後もその場所で葬られている人々の魂の叫びを知る上で、詩の表現がもっともふさわしいのかもしれません。この詩集はすでに、1953年、詩人の大江満雄(1906～1991)によって、全国八つのハンセン病療養所73名の詩227編からなる合同の詩集として編まれました。当代の著名な詩人小野十三郎らによって評価されているにも関わらず長い間絶版となっており、その詩集の存在を知ったのは、見学後でした。ところが、何かの縁というのか、翌月にこの詩集が岩波文庫として出版されました。

厚木 徹「伝説」 ふかぶかと繁った森の奥に/いつの日からか不思議な村があった/見知らぬ刺をその身に宿す人々が棲んでいた/その顔は醜く、その心早優しかった。…人々は土を耕し、家を葺き、麵麴を焼いた/…女たちの乳房は小さく、ふくまする子はいなかった。

志樹 逸馬「癩者」 光よ/空気よ/私のこころは吸っても吸っても渴く。/けれども私は生きているのだ。/ここには成長を夢見る沈黙の言葉がある。/心の鞭がある。

「杖」 癩菌に全身を疫され/みにくく 濁りきっている私だ/ただ/前へ 健やかに歩むちから/細い道を照らすひかり/生命に探る杖が欲しい。

「芽」 芽は/天を指さす ひとつの瞳/腐熟する大地のかなしみを吸って/明日への希いにもえる

「園長さん」 あなたの瞳の底には/天よりの声に鞭うたれた 純潔の血が流れている/癩者のかなしみをとおしてより高い人間性を/掴みだそうとしてみたゆまに悶えがある。

この後半の二つのフレーズをモチーフにして書かれたのが詩集の表紙の絵だと思えます。

「自らの境遇を『宿命』とせず、生命の肯定、人間への愛惜、差別への抗議を、力強くうたった戦後詩の記念碑」この詩集を読むことで、ハンセン病への旅を続けたいと思います。

研究センター11月活動の計画

- 2日（土）友愛協同セミナー公開企画
- 4日（月）労働者協同組合法学学習会
- 5日（火）名城大学ボランティア入門第8回、あいち在宅懇話会
- 6日（水）第16回愛知の協同組合間協同連絡会（幹事会）
- 7日（木）尾張地域懇談会世話人会
- 8日（金）～9日（土）第5回協同の未来塾
- 9日（土）～10日（日）ウクライナ避難民支援大交流・相談会
- 10日（日）多文化と災害公開セミナー（愛知県立大学共催）
- 11日（月）地域における子どもの学習支援研究会
- 12日（火）名城大学ボランティア入門第9回
- 14日（木）くらしと平和憲法を守る実行委員会
- 17日（日）消費者革新懇総会、サードセクター研究会（経済学・経営学部会）
- 19日（火）名城大学ボランティア入門第10回、第8回常任理事会
- 23日（土）アジアボランティアネットワーク東海世話人会
- 26日（火）三重地域懇談会三重のつどい「ささえあいの家」訪問、名城大学ボランティア入門第10回
- 27日（水）研究フォーラム環境世話人会
とうかい食農健サポートクラブ「第8回食農健のちよっといいはなし」
- 29日（金）第87回生協の（未来の）あり方研究会
- 30日（土）第5回生協職員マイスターコース、第6回地域共生フォーラム、あいち在宅懇談会

地域と協同の研究センター

ホームページ

下記QRコードをご覧ください。

ホームページQRコード



地域と協同の研究センター

Facebook

下記QRコードをご覧ください。

FacebookQRコード



※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。

参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS 第242号

発行日 2024年10月25日 定価 200円（税・送料込み）

年会費には購読料が含まれています

発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事 森 政広

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39 TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>